

恥ずかしがり屋の新妻は
夫に溺愛される

-結婚記念日にたっぷり愛されて
しまいました♡-

大和ソウ

【登場人物】

・ゆかり

新婚一年目の新妻。

ややおっとりめで恥ずかしがり屋。

・はじめ

ゆかりの夫。優しく紳土的。

妻のゆかりにはかなり献身的で、溺愛しがち。

「ゆかり、今度の土日空けておいて」

夕食を食べている最中、何の脈絡もなくはじめさんが言った。

私はその日が自分のバースデー、そして結婚記念日だと分かっていたから、彼が祝おうとしていることを理解し、笑顔を浮かべた。

「新婚旅行以来旅行に行つてないからね」

私とはじめさんは新婚さんだ。つい一年前挙式したばかり。二人とも忙しく仕事していたから、以来旅行は行けていなかった。休日出かける時も近場で済ませていた。

「久しぶりだし嬉しいな。ね、どこに行こうか？」

季節は四月。お出かけシーズンだ。行くところは山ほどある。

「今回の旅行は俺が決めたら駄目かな？」

「え？ ううん。いいけど……」

もしかしてサプライズで驚かせたいのかもしれない。そう思い、了承する。

「ゆかりをがっかりさせることはないと思うから」

「分かった。じゃあ、お任せしてもいい？」

「もちろん楽しみにしておいて」

「はじめさんのことだから、きっと私が好きそうなところを選んでくれるんでしょ
う？」

「さあね」

はじめさんは意味深な笑みを浮かべた。

当日まで秘密だと言われたからそれ以上は聞かなかつた。私はその日を待ち遠しく思いながら残りの日を過ごした。

予定していた週末、私達は予約していたチケットを握りしめ、新幹線に乗った。

今日は全てはじめさんのエスコート。何か手伝うと言ったけれど、はじめさんは笑顔で拒否した。だから私は未だどこが行き先なのか、どうやって行くのかも分からない。とにかくはじめさんにくっついて行くしかない。

新幹線に乗っていたのは一時間ぐらい。行ったことのない田舎の駅で降りた。はじめさんは駅を出てタクシーを拾うと目的地を伝えた。名前から察するに、きつと旅館なのだと思う。

車に乗っていると、窓から見える景色がどんどん変わっていく。やがて山間に入り、辺りは木々に囲まれた。

十分ほど走ったところで、景色が突然変わった。山桜が咲いているのが見えた。思わず車窓から見えた桃色に目を奪われる。

「ここは桜の名所なんですよ」、とタクシーの運転手が告げた。

はじめさんがどうしてここを選んだか、ようやく分かった。桜が好きな私のためにここを選んでくれたんだ。

桜のトンネルをくぐりながら、私は興奮してあちこちに視線をやる。

山が一面薄桃色になっている。街で見る桜も絶景だけど、この山桜も風情があつて素敵だ。

程なくしてタクシーは山間にある和風建築の建物——旅館に着いた。

旅館の玄関前にも大きな桜の木がある。どうやらここら一帯が桜の名所らしい。

「……すごく綺麗」

「感動するのはまだ早いよ」

「え？」

中に入り、チェックインを済ませます。中居に案内されて奥の部屋へと通された。

ここはずいぶん人気の旅館らしい。待合には人が密に座っているし、訪れている客のほとんどが女性、カップルだ。みんな桜目当てなのかもしれない。

やがて中居が桜の間と書かれた札の部屋で立ち止まった。障子の扉の鍵穴に鍵を差し込み、ガチャリと回す。

障子を引くと和風の部屋が見えた。短い廊下の奥に広い和室がある。かなり広い。住んでいるマンションのリビングよりも広いんじゃないだろうか。

床は畳だけれどソファやテーブルも置かれているし、窓も大きくて豪華だ。

中居の女性が一通り案内を済ませ、出て行く。私は説明なんて聞く余裕がなく、つい興奮して子供みたいにはしゃいでいた。

「な、なんかすごいね」

口には出さなかったけど、ものすごく高そうだ。

「ゆかり、あつちの障子開けてみて」

「障子？」

はじめさんが指差した方には大きな障子があつて、それが景色を隠していた。窓があるみたいだ。私は窓辺に近づいて、ゆつくりと障子を引いた。

障子を開けて先に広がっていたのは先ほど見た山桜だった。

ううん、さつきよりも桜との距離が近い。すぐ隣で咲いているみたいだ。旅館は斜面に建っているから、桜がより近く見えるのかもしれない。

あまりに美しいその光景に言葉が出なかった。

「どう？」

はじめさんにそう言われ、ようやく止めていた呼吸を再開した。

こんな綺麗な景色を見たのに、凄い、とか綺麗、とかそんな言葉しか出てこない。

山桜は窓を開けると今にもそこから入ってきそうだと。

「ここにいた理由、これがあつたから？」

「まあ、大体当たつてるかな。ゆかりが好きそうだと思つて」

「ありがとう……すごく嬉しい」

思わず抱きつくと、はじめさんは困つたような顔をした。

「ここだけじゃないよ。こっちの部屋も見て」

「え？」

そう言うと、はじめさんは私の手を引いて別の部屋へ向かつた。玄関の手前にある別の扉の中に入ると、鏡や洗面所がある。その奥がガラス張りになつていたからすぐに分かつた。

奥には露天風呂がついていて、先ほどと同じように桜が見える。

「ただ先ほどの窓と少し違うのは完全に野外で、風呂にかかるくらい桜の枝が近くまで伸びていたことだ。」

「ここからも桜が見えるんだ」

私はつい露天風呂がある外に出て確認した。

「すごい……お風呂場まで桜があるなんて。しかもホラ、触れるくらい近いよ」

簀の子の上に立って桜の枝を触る。湯船に桜の花びらが落ちてとても綺麗で、この中に入るのがなんだか勿体なく感じられる。

「この旅館はどこも桜尽くしだね」

「こういうの好きだろう？」

「さっすが、はじめさんセレクト」

私達は元の部屋に戻って荷物を解いた。なんだかホッとする。部屋にあったポットからお茶を淹れて、ソファに座って一息つく。

「えつと……これからどうするの？ どこか行く？」

「この辺りは旅館以外ないんだ。温泉に入ってゆつくりするつもりだったんだけど……外に行く方が良かった？」

「ううん、私もその方がいいかな。折角綺麗な景色なんだから。ちゃんと堪能したいしね」

「さっきの露天風呂でも入る？」

「えっ、まだお昼だよ」

「昼間からお風呂に入るのもいいんじゃないか？」

「はじめさんが立ち上がったので、私もつられて立ち上がった。」

彼はそのまま脱衣場に行つて服を脱ぎ始める。今更ながら一緒に入るんだと思つた。

私が入り口のところで隠れるようにじつとしていると、気がついたはじめさんが呆れたようにため息をつく。

一緒にお風呂に入るのは別にこれが初めてではないし、何度も抱かれたことがあるけれど、未だに恥ずかしいものは恥ずかしい。

「何やってるの？」

「だ、だつて。一緒に入るの……？」

「……そんなに一人で入りたい？」

はじめがさんがブスツとした顔をする。明らかに拗ねている顔だ。

私だつて一緒に入れるならそうするけど、どうしても恥ずかしさが勝つてそうすることを躊躇つてしまう。

彼の上半身は既に裸で、思わず目を背けてしまう。

「そんなに嫌ならいいよ」

はじめさんが怒ったように先ほど脱いだTシャツを持って脱衣場から出ようとする。思わずその手を掴んだ。

「何？」

「そうじゃなくて……あの、私……」

はじめさんは本気で怒ったりしない。いつもこうだ。これは、恥ずかしがり屋な私をうまく誘導するためのお芝居。

私だって、折角自分を喜ばせようとあれこれ考えてくれたはじめさんを怒らせようなんて思っていないし、こう言ってくれば素直になることができる。

「あの……い、一緒に入ってもいい……？」

おずおずと申し出ると、はじめさんは満足気に笑った。

「……ゆかりは可愛いけど、本当に恥ずかしがり屋だね。分かったよ。先に入ってるから後から来て。あっち向いておくから」

そう言ったってどうせ後で見られるのだけど。私は納得して一旦脱衣場から出た。

脱衣所から音が消えた後、脱衣所に再び戻る。はじめさんは既に湯船に浸かって外の方を向いていた。

「あれ？」

ふと、脱衣所に置かれあった瓶に目がついた。竹籠の中にプラスチックの袋がいくつか、そして白い瓶が置かれている。

なんだろうと思つて手に取ると、どうやら入浴剤のセットらしかった。一つは塩の袋。瓶には日本酒が入っているらしい。高い旅館だからか、こういうた備品が充実している。

私は服を脱ぐと、タオルを一枚と日本酒の瓶を持って露天風呂の中に入った。

露天風呂はベランダのように屋根が付いていて、なかなか広い。少なくとも四畳分はあった。床全体が簀の子板で覆われていて、その中に埋め込まれるように円形の湯船がついている。

満開の桜がとても綺麗だ。湯船に浸かりながら湯の中に落ちた桜の花びらを掬しめる。

私は掛け湯をした後、そつと湯船に足を浸けた。

「それは？」

ゆつくりと振り向いたはじめさんが尋ねる。

「日本酒だって。お風呂に入れるみたい。せつかくだから入れてもいい？」

「いいよ」

日本酒を湯船の中に移していく。透明だからほとんどわからないけど、微かに酒の香りが漂ってきた。

「ゆかり、なんでそんなに離れてるの？」

人一人分くらいの距離を開けて座っていると、はじめさんがまた拗ねた顔をした。

「だって……」

「もう、ほら。おいで」

はじめさんは私の手を掴んで、自分の方へ引き寄せた。向かい合うように軽く抱きしめると胸が当たってつい身体が強張ってしまう。

「誕生日おめでとう。それと、結婚一周年おめでとう」

「うん……おめでとう」

「早いね。もう一年か」

一年前のことを思い出した。

去年のこの日、はじめさんと私は結婚式を挙げた。私の誕生日。そして結婚記念日。本当に楽しくて幸せな日だったことを覚えている。

「俺は今でも変わらないよ。ゆかり……愛してる」

「はじめさん……私も愛してる……」

キスなんていつもしていることなのに今日は特別に感じた。お風呂でしているからだろうか、それともこの変わった空間がそう思わせているのだろうか。

顔を手で引き寄せて、何度も何度もお互いの唇を啄ばんだ。

「んあ……ん、んむ……ふ……っ」

やがてそれは深くなつて来て、はじめさんは強く私を抱きしめながら舌を口内に侵入させた。背筋が震えるような快感が伝わってくる。ギュッと抱きしめられると胸の突起が反応してしまう。

——あ……はじめさんの……大きくなってる。

近付くとはじめさんのペニスがそり立つていることに気が付いた。お湯の中に浮いたペニスが私の足に軽く当たると。

はじめさんの顔が少し赤い。興奮しているのは彼もらしい。

「もう固くなってるよ？ 相変わらずえっちな身体だね」

「これは……っ、はじめさんが……」

「俺はまだ胸には触ってないんだけど」

はじめさんは身体を逆転させて、私を湯船の縁側にもたれ掛けさせた。

「見て。ゆかりのおっぱい……桃色になって桜みたいだよ」

はじめさんはそこに顔を埋めた。

谷間を舌でなぞっていくと、ゾクゾクした感覚がして身体が固くなる。

「ああっ……は、はじめさん、だめ……っ」

「ゆかりの好きな所に触ってあげようか？ どうしようかな？」

はじめさんは舌を突き出し、乳首をつつくかつかないかのところで寸止めした。そこからなかなか触ろうとしない。私はそれがもどかしくて思わず身をよじらせる。

早く触って欲しいけど、そんなこと言えるわけもない。はじめさんは意味ありげに笑いながら私を見るばかりでなかなか進んでくれなかった。

「ちゃんと素直に言ったら触ってあげるよ」

「や、やだ……っそんなの言えるわけ……」

「素直にならないとずうっとこのままだよ？」

息がそこにかかってくすぐりたい。彼の舌がチロチロと乳首に触れそうなところで動いて、視覚的に恥ずかしい。

「ゆかり、一年経ったんだからもうちよつと変わった方が良いんじゃない？ それとも俺に身体を許すのが嫌？」

「そうじゃないの……つただ、恥ずかしくて……」

「慣れたら気にならなくなるよ。別におかしなことじゃないし、俺はその方がずっと嬉しいな。ゆかりが避けてたら、俺のこと嫌ってるのかと思うし」

「それもそうだ。もう結婚して一年も経つのにいまだにこんな具合では彼に呆れられてもおかしくない。」

「毎度毎度事に及ぶたびに、はじめさんは私の本音を聞き出す事に苦労していた。」

「でも、あの……なんて言ったらいいか分からないし、こういう時どうするのか知らなくて……」

問題はいろいろあるけれど、一番は私の初めての人がはじめさんだということだ。その前に何人かと付き合っていればよかったのだけれど、私は初めて付き合ったはじめさんとセックスし、そして結婚することになった。経験不足だからか、どうも積極的になれない。興味が無いわけじゃない。嫌いでもない。

「簡単だよ。して欲しいって言えばいいんだ」

「そ、うなの……?」

「言葉にしなきゃ伝わらないよ。俺だつてエスパーじゃないんだから」

「そうだよ、と呟く。少し目をそらして間をためた。」

「多分、はじめさんは私が何を求めているかくらい言葉にしなくてもお見通しだと思っけど、私から直接その言葉を聞きたいのだろう。」

「あ、あの……」

「どこに触って欲しい……?」

「んんん……っ♡」

少し、自分の胸を突き出す。

「ちゃんと saying 誰のどこを触って欲しい？」

「……っ私の、胸、触ってえ……っ♡」

やっとその言葉を聞くと、はじめさんは乳輪に口を押し付けた。既に突起は固くなっていて、舌で転がすとコリコリする。

柔らかい舌がくるくると乳頭に円を書く。時々ふにふにと乳首を舌で押ししたり、歯で軽く噛んだりした。

「おっぱい、大きくなつたね。俺が揉んだおかげ？」

「っ、はじめさん……は、恥ずかしい……」

「これからもっと恥ずかしいことしてあげるよ」

はじめさんは私の身体を湯船から持ち上げると、縁に座らせそのまま押し倒した。簀の子が少しひんやりとして冷たい。

それに気づいたのかすぐに桶で身体にお湯をかけてくれたけれど、すぐに脚を開かせようとしたものだから驚いた私は脚を閉じようと必死になった。

「やだあつ！ はじめさん……っこんな恥ずかしいよ……っ」

「何回俺に見せたと思ってるの？ 今更だよ」

「だってこんな所で……」

「それより、ここは外だからあんまり大声出すと隣のお客さんに聞こえるかもね」

はつと気付いて口を噤む。確かに、ここは露天風呂だから隣にも部屋があるはずだし、聞こえても不思議ではない。

だけどこのまま彼に触れられて声を抑えるなんて芸当は出来そうにもなかった。

「じゃあ、これ啞えて」

先ほど持ってきたタオルの端を口の中に入れられる。これで声を我慢してということだろうか。何もないよりはマシかもしれない。

「脚、開いて。洗ってあげるから」

彼はそう言つて膺を隠すひだを左右に広げる。ほんのり冷たい外気がそこに当たつて思わず身体が反応した。そこに桶でお湯をチョロチョロとかけると、熱に反応してピクピクと動く。

「んん~~~~~っ♡♡んむ、んっ♡♡」

「ゆかりのおまんこは綺麗なピンク色だね。ちゃんと綺麗にしないと……」

はじめさんは膺の周りを指で触れながらお湯をかけてそこを丹念に綺麗にしていく。

その度に私のそこがビクビクと反応して、私は必死でタオルを嚙んで声を抑えた。

下をいじっていたはじめさんがふと、顔をあげる。

「……今、すっごいいやらしい格好してる。やばいな、もう入れたい」

「んん……っ♡♡んぐ~~~~♡♡」

「今日はゆかりを悦ばせる日だからね。舐めるのと、指を入れるのと、このまま視姦されるの、どれがいい？」

私は返答に困った。どれにしたって自分が悶える結果になるのは目に見えてい

る。はじめさんの表情はなんとも楽しそうで、悦ばせると言いながら自分が楽しんで
いることは分かっていた。

「……全部やって欲しそうだね」

ブンブンと首を振ったが、彼にそんなもの通じるはずもない。

はじめさんは濡れたそこにゆつくりと指を差し込んでいき、主張した突起に舌を近づけた。

——ダメ！ そんな事されたらおかしくなっちゃう！

だけでも遅くて、彼の指が内壁を押し上げ、舌が突起に触れると身体に電気が走ったように背中がゾクゾクした。

まだ大して触れられていないのにそこから愛液が溢れてくるのがわかる。ここ一年ですっかり彼の身体に反応するようになってしまっていた。

「気持ちいいんだね。ゆかりのえっちなお汁でとろとろになってるよ」

内壁がグニグニと蠢き、はじめさんの指を圧迫する。

「ゆかり、中はどうなってるの？ おまんこの中で指が動いてるの分かる？」

「んんっ……ふ……ふ……♡♡」

こんな格好を見られて恥ずかしいのに、彼に与えられる快感が堪らなく気持ちいい。このタオルと羞恥心がなければ気持ちいいと何度も叫んでいたと思う。

溢れた愛液を残さず舐めるように生温かい舌がそこを往復する。私はタオルを噛んで必死に耐えた。

「ゆかり可愛いすぎ……っこんなに濡らして……っ♡いやらしいおまんこだね♡」

「んんっ~~~~♡んんっ……んぐ~~~~♡」

「……そろそろいいかな」

はじめさんは私の身体を起こしてタオルを外すと、湯船に戻した。

少し冷えた身体にお湯の温度がしみて気持ちがいいけど、先程与えられた快感にまだ身体が酔っていて、なんだかクラクラしてしまふ。

「じゃあ、少し交代しようか」

今度ははじめさんが縁に腰掛けた。

彼の大きくそそり立ったペニスが目の前に現れる。私は思わず顔をそらしてしまつた。

今まで何度となくそれによつて快樂へ落とされてきたせいで、これからまたそうなるのかと思うと平常ではいられなかつた。

「触ってみる？」

チラリと視線を向ける。そう言われたら嫌だとは言えない。むしろそれが今どれほど硬いのか確かめてみたい。

私は心を震わせながらゆつくりと頷いた。

自分の中に何度も出入りしたことのあるペニスにゆつくり触れると、まるで鋼のように硬くて、思わず溜息を漏らしてしまう。

「はじめさんの……硬い……♡」

「誰のせい？」

「私……?」

「うん。ゆかりの恥ずかしい姿を見てこうなっちゃったんだよ。好きなように触つてみて」

ごくりと生唾を飲み込む。ゆつくりとそれに口を近づけ、食べ物にかぶりつく時のように少し口を大きく開けて口内にそれを取り込んだ。

先から我慢汁が出ていて少ししょっぱい。一度奥まで入れると、それを吸うように頬をすぼめる。

「んぐ……っんん……♡♡」

ペニスの裏筋を舌で舐めると、はじめさんの顔が歪む。

フェラはあまりしたことがないからうまくできる自信がない。でもせつかくこうしているのに、がっかりして欲しくない。私は一所懸命口を窄めて前後にスライドさせた。